台大日本語文研究第 25 期
2013 年 6 月，頁 81-106
2012-10-20 收稿、2012-12-12 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2013.25.81

句尾的「shi」的語意
—以日劇為資料—

深尾圓*

摘要

本篇論文以日劇爲資料、針對談話當中出現的句尾「shi」的語意及用法進行考察。從這四部日劇所顯示的資料當中，可以了解到以下三件事。說話者和聽者間的同伴意識高的話，句尾的「shi」的使用頻繁度也會跟著上升。句尾的「shi」較多被使用在親近者之間。句尾的「shi」較多被年輕人使用。在本稿「shi」的語意做了如下的規範。

句尾的「shi」：說明前言。在情態形式上又有期待聽者能有一致的想法。

從收集的資料，將句尾的「shi」分成了三類：①理由或者說明；②對聽者想法一致的期待 A（說話者和聽者有共同想法、或認爲有共同想法）；③對聽者想法一致的期待 B（說話者認爲聽者不抱有共同想法）。

對於說話者有想法一致意識這樣的一個期望值，說話者期待的事情和聽話者的見解一致的時候、是句尾的「shi」的用法②，而雙方意見不一致的時候，以年輕族群爲首最近常使用的句尾的「shi」的新的用法③。像這樣規定句尾的「shi」就能說明一直以來的用法和新的用法。

關鍵詞：「shi」、說明、說話者、一致的想法、期待

* 國立高雄大學東亞語文學系專案副教授

A Study on Sentences Ending with *Shi*: Using 4 Dramas as Data

Fukao, Madoka*

Abstract

In this paper sentences ending with *shi* are analyzed through the data of four dramas. The data show that sentences ending with *shi* are used mostly among people with close relationship and that a high frequency of use of *shi* was seen in the dramas that people have companionship each other. The data also show that sentences ending with *shi* are often used by young people.

Shi is defined as a word which gives an explanation to the former statement and sentences ending with *shi* express speaker's expectation to share same feelings or ideas with listeners as a modal meaning. *Shi* can be divided into three groups according to its meanings in the context. Group1 express addition, reason, explanation. Group2 and 3 express a speaker's expectation to share same feelings or ideas with listeners. It can be explained that two different usages of *shi* are due to the conditions if there is a gap or not between a speaker's expectation and listeners' views.

Keywords: particle *shi*, explanation, speaker, shared feelings, expectation

* Appointed Associate Professor, National University of Kaohsiung

文末の「し」の意味機能
―ドラマの分析を通して―

深尾まどか*

要旨

本稿では、ドラマを資料として文末の「し」を考察した。資料を分析した結果、次のことが明らかになった。①話し手と聞き手の間で仲間意識が感じられる場面が多いドラマほど、文末の「し」の使用頻度も高くなる。②文末の「し」は親しい人の間で多く使用されている。③文末の「し」は、若い世代でより多く使用されている。

そして、収集した用例から、文末の「し」を次のように規定した。

「し」:前言の説明をするという語義を持ち、モーダルな意味として、聞き手との間に意識の共有化への期待を表明をする。

さらに、収集したデータから、文末の「し」を次の３つの用法に分類した。①累加、理由、説明。②意識の共有化への期待 A（話し手と聞き手が同じ意識を持つ、または、持てると考えられる場合)。③意識の共有化への期待 B（話し手と聞き手が違う意識を持つと考えられる場合)。話し手の中には、意識の共有化という期待値があり、話し手の期待する事柄と聞き手との見解が一致する場合が、「し」の②の用法であり、両者の間にズレがある場合が、若い世代を中心に最近使用されるようになった新しい「し」の用法、③であると考えられる。

キーワード：助詞「し」、説明、話し手、意識の共有化、期待

* 国立高雄大学東アジア言語学科嘱託准教授

文末の「し」の意味機能
―ドラマの分析を通して―

深尾まどか

一、はじめに

本来、接続助詞に分類される「から」「が」「けど」「し」「のに」などの語が、文末に用いられることによって、話し手の心的態度を表現するモダリティ表現としての役割を果たすことがあることは既に多くの先行研究で指摘されている(高橋 1993、沖 2006、白川 2008)。高橋(1993：22)は、上のような文末の形式について、「文の内容としての、事柄的な論理関係を表すだけでなく、話し手の、聞き手に対するやりとり関係に関わる役割をも演じることになる」と述べている。

(1) 君はいいから。

(2) 会いたいんだけど。

(3) 私だって忙しいんだし。

本稿でも、文末の助詞「し」には、話し手の心的態度を表現する用法があるのではないかと考えている。本稿で研究の対象とするのは、次のような文末の「し」である。

(4)(自分のことを)家庭的な父親じゃなかったからね。母親が亡くなってからは、家のことはずっとあいつ(引用者注：息子)に任せっぱなしだったし。(「ホタルノヒカリ２」フジテレビ)

(5)(雨に濡れた直輝)

莉子：直輝、今日は、早く帰らないとね。

直輝：え？

莉子：ほら、風邪引いちゃうと良くないし。

直輝：大丈夫だよ。俺、今超元気だもん。(「ブザービート」フジテレビ)

（６）（かなえの汚い部屋で、司会者が「大丈夫ですか。呼吸器系に問題とか出てきませんか」とゲストに聞いているのを、そばから聞いて）

かなえ：言い過ぎだし、みたいな。（「学校へ行こう」TBS）

（４）は、「理由や具体的内容」（高橋1993：21）を表現しており、従来の「し」で説明できる「し」である。（５）は、理由を表現すると同時に、話し手の心情が感じられる用法である。そして、（６）は比較的新しいと考えられる「し」で、理由ではなく、話し手の主張を直接表現する「し」である。（６）のように、この「し」は、10年ぐらい前[1]にはすでに使われており、最近では、特に若い人達の間で、定着した感がある用法である。

本稿では、文末の「し」の中心的な意味機能とこれら３つの「し」の用法について明らかにすることを目指す。資料として、テレビドラマを選び、談話の中で文末の「し」を考察する。

本稿の構成は以下のとおりである。第二節で、先行研究を概観する。第三節で、研究対象について説明する。第四節で、文末の「し」の使用についてデータの概要及び分析結果のポイントを述べる。第五節で、文末の「し」の意味機能を考察する。第六節で、文末の「し」の３つの用法を記述する。第七節で、データを基に３つの用法の使用頻度を分析する。第八節で、３つの用法間の関係について本稿の考えを述べる。そして、第九節を本稿のまとめとする。

二、先行研究

接続助詞「し」の研究には、国立国語研究所（1951）、寺村（1984）がある。国立国語研究所（1951：58-59）では、「し」は接続助詞として分類されており、次の 3 つの用法があるとされる。①共存事実を列挙し、互いに呼応させて強調の意を含ませる。②二つ以上の事実を並べ挙げて、それらの累加を材料（理由）とする立論（判断）

[1] 「学校へ行こう」は、TBS のバラエティ番組であり、これはその中の「汚ギャルバスターズ」というコーナーで 2002 年 5 月-11 月に放送されたものである。放送時間はウィキペディアによる。

を導く。③一つの事実を挙げて、他を言外に呼応させ、その全体を材料（理由）とする立論（判断）を導く。この場合、理由として挙げる材料が一つで他を言外に暗示している形のため、婉曲になる。寺村（1984：72）は、「話し手は背後に「統括命題」を頭に置き、その集合のメンバーを並べあげようとするとき、それらの説を「し」でつなぐ。そして、この形式は、話し手と聞き手の共通の了解、ないし社会的な通念に大きくよりかかった性格のものである」と指摘している。

これらの先行研究から、「し」が単純な並列的接続表現ではないことがわかる。寺村（1984：72）の指摘は、文末の「し」のモーダルな意味を考える上でも重要であると考えられる。

文末の「し」の先行研究には、国立国語研究所（1951）、高橋（1993）、白川（2008）がある。国立国語研究所（1951：58-59）は、「し」の終助詞的用法として、「言いさし。（後続すべき立論を控めに言外に響かせる。）」と述べて、次の例を挙げている。

（７） ハンドバッグもいいけれどこれでまだ間に合うし…。

高橋（1993：21）は、「し」について、「同類のことを表す句節が後に続くことを示すのに使うのだが、理由や具体的内容を示すのに使うこともある。「し」で終わる文は、ほとんどがこれをひきついでいる」と述べて、次の例を挙げている。

（８）なんだよ、ガキじゃあるまいしー。（向田邦子「あ・うん」）

そして、白川（2008：10）は、「『一般に、P シ』は、文内容 P が成り立つだけでなく、それ以外にも成り立つような文内容 X が併存することを表す」と述べて、次の例を挙げている。

（９）「よかったら今度、ぼくが行っているダンスサークルのパーティに来ませんか。」「いや、まだ、そんなに踊れないし。」（周防正行『Shall We ダンス？』）

先行研究から、接続助詞「し」は、「統括命題」のメンバーを並べるとき使われる。そして、話し手と聞き手の共通の了解、ないし社会的な通念に大きくよりかかった性格を持つこと、さらに、文末

の「し」は、累加、理由や具体的内容を示すのに使われること、後続する立論の婉曲的な主張をすること、文内容以外にも成り立つような別の文内容が併存することを表すことがわかった。確かに、これらの先行研究の規定は、それぞれの文脈で「し」の意味について適切に捉えているように見える。

しかし、先行研究では、文末の「し」の新しい用例は説明しにくい。次の「し」は、「婉曲的な主張」（国立国語研究所 1951：58-59）ではなく、話し手が聞き手に強い主張をする時に使われている。

（10）（ロックをやめてサラリーマンを始めた男を、昔の仲間がまたバンドに参加させようと訪れる。）
昔の仲間：お前も同じような格好（引用者注：パンクの衣装）してたじゃないか。
男：もうやめてるし！　とりあえず。（「ガチンコ」TBS）

次の（11）（12）では、「し」が表現するのは、「後続すべき立論を控めに言外に響かせる」（国立国語研究所 1951：58-59）や「文内容 P が成り立つだけでなく、それ以外にも成り立つような文内容 X が併存することを表す」（白川 2008：10）のではなく、直接相手のことばを否定する発話で「し」が使用されている。

（11）男：えっ？（疑って）彼氏がいる？
女子学生：いるし。

（12）（キャビンアテンダントの研修を終え、最終試験で不合格になるが、「補講は２、３日で終わらせて OJT に進んでみせますから」と気丈に言う洋子）
ソバ屋のおじさん：さすが洋子ちゃん、男だね。
洋子：っていうか、私、女だし。（「アテンションプリーズ」フジテレビ）

また、次の「し」は、独り言的に使われているが、話し手に「このことだけが判断材料として成り立つわけではない」（白川 2008：10）という発話意図はなく、直接「来ちゃった」という事実に「し」が付加されている。

（13）（「占いなんか信じない」と言っていた山崎が、同僚のキイナに誘われ、結局、占いの館に来る。）来ちゃったし。（「キイナ～不可能犯罪捜査官～」日本テレビ）

本稿では、こられ新しい用法の「し」も含め、ドラマから用例を集め、談話における文末の「し」の意味機能について新しい視点から考察する。

三、研究対象

本稿では、資料として、テレビドラマを選び、談話の中で文末の「し」を考察する。テレビドラマを研究の対象とすることについて、メイナード（2001：92-93）はテレビドラマのことばは、実際のことばとは同一ではないが、両者がかなり似通ったものであることは簡単に想像できると述べ、恋愛ドラマについて、感情の起伏の激しさが表現されるので、言語表現を人間の感情をも含む広いコミュニケーションの有様として考察する際に特に有益であると指摘している。本稿でもメイナード（2001）と同様に、ドラマでは様々な場面で使用される「し」が観察できると考え、ドラマを資料として選択した。また、本稿では、助詞「し」の新しい用法も対象としており、バラエティ番組やインタビューなどの生の資料より、1つ1つの発話が考えて作られているドラマでは、誤用やまだそれほど受け入れられていない表現などは比較的少ないと思われ、より日本語として定着した資料を集めることができるのではないかと考えた。

なお、本稿では、次のように、1つの発話に、2つ以上の「し」がある場合も、「し」で終わるものは、文末の「し」としてどれも分析の対象とする[2]。

（14）（合宿先で）

[2] 正確には、前の「し」は文中の「し」であり、後ろの「し」は文末の「し」であると考えられるが、1つの文に2つ以上の「し」があり、文末に「し」がある場合、文中の「し」も、その意味するところは文末の「し」と同じであると思われ、よって、2つの「し」を区別して考える理由はないと考え、文中の「し」も文末の「し」として集計した。

直輝：あのう、川崎さんとかは会ってかないの。
莉子：うん、ノーメークだし、ほら、差し入れとかも何も持ってきてないし。（ブザー）

四、データの概要

（一）対象データ

本稿では、4 本のテレビドラマから助詞「し」のデータを収集した。人気のあったドラマ[3]の中から、4 つの異なるジャンルのドラマを選び、分析の対象とした。それぞれのドラマの名称及び詳細は表 1 のとおりである。

表 1　ドラマの詳細

ドラマ名	内容	ジャンル	製作	DVD 発売日	時間
BOSS	特別犯罪対策室の刑事が事件を解決していくドラマ。	刑事ドラマ	フジテレビ	2009.10.21	540 分
ブザービート	夢を追う若者達を描いたドラマ。	青春恋愛ドラマ	フジテレビ	2010.1.6	561 分
流れ星	臓器移植の問題をテーマに家族の愛情を描いたドラマ。	社会派ドラマ	フジテレビ	2011.4.20	478 分
ホタルノヒカリ 2	仕事に恋愛に悩みながらも頑張る OL を描いたドラマ。	ウーマンライフドラマ[4]	日本テレビ	2010.11.26	532 分

（二）文末の「し」の使用

4 本のドラマを調べた結果、「し」は全部で 342 例あり、そのうち、文末の「し」は 241 例だった。文末の「し」の占める割合は、70.5%であり、ドラマの中の会話で「し」が文末に使われる割合は多いと言える。図 1 に、それぞれのドラマの「し」の出現数、図 2 に、文末の「し」の出現数を示す。

[3] 4 本のドラマは、いずれも最高視聴率 15.8%-20.7、平均視聴率 15%前後の高視聴率のドラマである。（「Audience Rating TV」による。http://artv.info/）
[4] 「女性の生き方を中心にしたテレビドラマのジャンル」（「おしえてテレビ san」による）である。http://iwa.ne-e.jp/tv/dramagenre/womanlifestyle.html

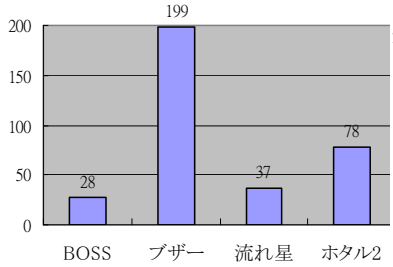


図1 「し」の出現数

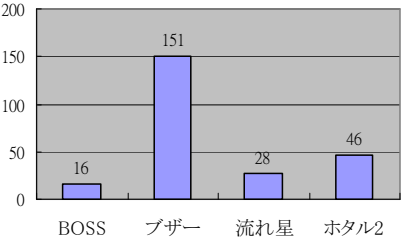


図2 文末の「し」の出現数

「BOSS」では、文末の「し」は 16 例と 4 つのドラマの中で最も少なかった。「BOSS」は、刑事ドラマで、緊迫した事件の描写を中心に犯人を追う個性的な刑事達が描かれており、話し手と聞き手の間の仲間意識が感じられる場面は少ない。一方、同世代の若者の恋愛と友情を描いた「ブザービート」(以下、「ブザー」と略す。)では、文末の「し」の使用は、151 例と多かった。恋人、友人、プロバスケットバールのチームメイトの間で仲間意識は高い。そして、「流れ星」では、文末の「し」の使用は 28 例だった。病気の妹を巡る家族の愛情や偽りの結婚が本当の愛に変わるまでを描いたドラマであるが、ドラマの中心に、違法臓器移植という重いテーマがあり、そのため、「ブザー」に比べると、仲間意識が感じられる場面は少ない。「ホタルノヒカリ２」(以下、「ホタル２」と略す。)では、文末の「し」の使用は 46 例だった。有能な OL で、実は家ではジャージ姿でくつろぐことが好きな蛍を中心に、仕事の内容ではなく、プライベートな内容の発話を中心に、会社の同僚、仲の良い先輩、後輩、そして、恋人の部長などとの間で、文末の「し」の使用が見られた。

４本のテレビドラマのデータから、次のことがわかった。①話し手と聞き手との間で仲間意識が感じられる場面が多いドラマほど、文末の「し」の使用頻度も高くなる。②文末の「し」は、親しい人の間で多く使用される。(詳しくは、第七節を参照されたい。)

五、文末の「し」の意味機能

（15）（いなくなった友人を捜してほしいと兄に頼む妹。）

兄１：俺は無理だからな。仕事だってあるんだ！

「し」がない（15）では、兄１が仕事を理由の１つとして「仕事だってあるんだ！」と相手が取り付く島もない強い調子で断っている。この発話に「し」を付加すると、全く違ったニュアンスになる。

（15’）（いなくなった友人を捜してほしいと兄に頼む妹。）

兄２：俺は無理だからな。仕事だってあるんだし。

「し」が付加された兄２の発話は「仕事だってあるんだし。」と聞き手が配慮された柔らかい調子になっている。この「し」には、聞き手に説明し、わかってもらいたいという話し手の気持ちが感じられる。

聞き手配慮についてさらに考察するため、次に、理由を中心的な意味として持つ「から」を使った発話と、「し」を使った発話を比較する。

（16）瀬乃：（手を）つないじゃダメ？ 友達だし。

蛍：いや、つながないんじゃないかな。友達だから。

瀬乃：つながないか。（ホタル２）

（16）では、蛍と手をつなぎたい瀬乃が、「友達だし」と「し」を使い、理由を述べると同時に、蛍が自分と同じ気持ちになることへの期待を表現している。それに対して、蛍は、「友達だから」と「から」で単に理由、または、話し手の主張が聞き手に向かって直接表現されている。

次の（17）～（19）も、話し手は「し」の付加により、聞き手が自分と同じ気持ちになることへの期待を表現している。

（17）直輝：ふーん。実家どこだっけ？

莉子：山梨。美味しい果物たくさんあるんだよ。桃とか。

直輝：へー！じゃあ…俺も行こっかな。

莉子：えっ、本当？

直輝：嘘、嘘。練習あるし。行きたいけどさ。（ブザー）

（18）（雨の中、公園でずっと直輝が来るのを待っていた莉子）

莉子：フフ。本当はね、ちょっと、怖かったんだ。もう来てくれないんじゃないかなーと思って、ちょっと怖かった。

直輝：行かないわけないじゃん。ちゃんと約束したし。（ブザー）

（19）（一度事故とした処理された事件を、殺人事件ではないかと報告した花形。結局、事故だったとわかり、花形を批判する岩井。）

岩井:そういうこっちゃ。やる気茶屋のとんだ勇み足やな。

山村：まあまあ、捜査を指揮したのはボスだし。（BOSS）

（17）では、練習があるから、山梨に行くことができないことをわかってもらいたいという話し手の気持ちが感じられる。（18）では、「約束したら自分は守る」ということをわかってもらいたいという話し手の気持ちが感じられる。（19）では、悪いのは、実際に捜査を指揮したのはボスで、花形は悪くないということを、同僚にとりなす意図で「し」が使われている。つまり、聞き手の理解を求めるという状況で「し」が使用されており、その付加により、話し手のわかってもらいたいという気持ちが表現されている。

これらの発話に「し」ではなく「から」を付加すると、単に理由や話し手の主張を表現する発話となり、聞き手の意識は特に配慮されていない。

（16’）瀬乃：（手を）つないじゃダメ？ 友達だから。

（17’）直輝：へー！じゃあ…俺も行こっかな。

莉子：えっ、本当？

直輝：嘘、嘘。練習あるから。行きたいけどさ。

（18’）莉子：フフ。本当はね、ちょっと、怖かったんだ。もう来てくれないんじゃないかなーと思って、ちょっと怖かった。

直輝：行かないわけないじゃん。ちゃんと約束したから。

（19’）山村：まあまあ、捜査を指揮したのはボスだから。

次の（20）～（22）では、話し手の考えや、心情、気持ちを表現する発話であるが、「し」の付加により、聞き手に考えや気持ちをわかってもらいたいという話し手の心情を表現する発話となる。

（20）（居酒屋で、会社を辞めたいという後輩に対して、辞めないように説得する蛍）桜木さんは、3年目だったよね？ これからじゃないかな。会社も桜木さんに、期待してると思うし。（ホタル２）

（21）直輝：今日さ、夜行ってもいい？
菜月：夜？ いいよ。
直輝：じゃあ、俺、今日なんか作るよ。なんか買ってくね。
菜月：でも、夕飯は無理かも。残業あるから。ごめん。またにしてもいい？ ゆっくりできないと、寂しいし。（ブザー）

（22）直輝：公式戦始まったら見に来て。
莉子：公式戦？
直輝：君が見てると強くなれそうな気がするし。（ブザー）

これらの発話に「し」ではなく「から」を付加すると、聞き手の意識は特に配慮されず、単に話し手の主張や理由を聞き手に伝える発話となる。

（20’）桜木さんは、3年目だったよね？ これからじゃないかな。会社も桜木さんに、期待してると思うから。

（21’）菜月：でも、夕飯は無理かも。残業あるから。ごめん。またにしてもいい？ ゆっくりできないと、寂しいから。

（22’）直輝：公式戦始まったら見に来て。
莉子：公式戦？
直輝：君が見てると強くなれそうな気がするから。

以上の観察から、本稿では、上記のような文末の「し」を「前言の説明をするという語義を持ち、モーダルな意味として、聞き手との間に意識の共有化への期待を表明をする。」と規定する。「意識の

共有化への期待」とは、聞き手に考えや気持ちをわかってもらいたいという話し手の心情のことである。

六、文末の「し」の３つの用法

本稿では、談話の中で文末の「し」を観察した。収集したデータから、文末の「し」を次の３つの用法に分類した。①累加、理由、説明。②意識の共有化への期待 A（話し手と聞き手が同じ意識を持つ、または、持てると考えられる場合)。③意識の共有化への期待 B（話し手と聞き手が違う意識を持つと考えられる場合)。①が接続助詞としての「し」であり、②、③が終助詞的用法の「し」である。②、③は、話し手の心的態度を表現するモダリティ表現である。一方、①の接続助詞としての「し」には、モーダルな意味要素はないと考えられる。それぞれの用法の例を次に挙げる。

①累加、理由、説明

これは、高橋（1993：21）で指摘されていた文末の「し」の用法である。主に前言に続けて、累加、理由、説明をする働きをする。

（23）（3 年ぶりに東京本社に転勤となった蛍に）

二ツ木：君がいない間ね、随分と体制、変わったんだよね。以前いたメンツも、ほとんど、いなくなったし。（ホタル２）

（24）（取れかけたボタンを直した際、指を針で刺してしまったバイオリニストの莉子。）

川崎：驚いたよ。振り向いたら血出してたから。

莉子：フフフ。そういえば私、小学校の時から家庭科苦手だったんです。指に怪我するといけないからって、ドッチボールとかバスケットとか、そういうのも全部見学だったし。」（ブザー）

②意識の共有化への期待 A

この用法の「し」は、話し手が聞き手との間に、同じ意識を共有できるという期待を表現する。話し手の気持ちとしては、「そうでし

ょう？」に近い意味を持つ。

（25）（蛍にビールを勧める瀬乃。）一生懸命、働いた後のビールはうまいんだろ？ 明日、休みなんだし。（ホタル２）

（26）莉子：女慣れしてると思ってたんだよ。
麻衣：でも、考えてみてよ、相手は大人の男だよ。
莉子：大人の男？
麻衣：そう。そりゃさ、多少は色々あったでしょうよ。あんだけ、カッコ良くて、バスケットもできて、それで、誰とも遊ばなかったって方が変でしょう？
莉子：でも、女の人、取っ替え引っ替えだったなんて。
麻衣：それも仕方ないよ。女の方が放っとかなかっただろうし。（ブザー）

独り言や心の中で思ったこと(＜　＞で示す。)に使用される「し」もある。この場合は、聞き手は、自分であり、話し手は、心の中で、もう 1 人の自分を設定して、「し」で自分の出した見解を確認、納得していると考えられる。

（27）（部長に「結婚という言葉に、縛られるのはよそう。結婚は、やめよう。」と言われた蛍。その言葉を思い出し）あー、まあ、いっか！＜私のような女でも、結婚できると思えただけで。フラれたわけじゃないし、部長が私のものには変わりないんだし。＞（ホタル２）

③意識の共有化への期待 B

これは、文末「し」の比較的新しい用法である。この用法の「し」は、聞き手と話し手が異なる見解を持つ場合、つまり、話し手の期待する事柄と、聞き手との見解との間にズレがある場合、相手の前言を直接否定する発話で使用される。本来は、聞き手と同じ意識が共有できるはずなのにという話し手の気持ちが根底にあるが、聞き手の言動が期待するものとは異なるため、修正の必要が起きる。意味としては、「そうじゃない。～なのに。」「そうじゃなくて、だから。」に近い。聞き手と異なる意見を提出したり、聞き手や話し手自身の

言動を訂正をする働きを持つ。

（28）（２人で出かける涼太とマリア）

涼太：１回、やってみたかってん。浅草デート。

マリア：デートじゃないし。

涼太：デートやし。（流れ星）

（29）（クラブの請求書を見て、驚いて）

岩井：22 万円！22 万円！

山村：ああ、ボルト入れちゃったからね。

岩井：ボトルやし。おっさん、完全にぼられてるやんか。（BOSS）

独り言的にも、「し」は使用できる。（30）は、自分の期待する状態と、実際の状態の間にズレがある場合である。

（30）（元カノの問題を解決した直輝。）よし！（待っている莉子に電話をかけようとして）電池切れてるし。まじかよ。（ブザー）

以上、文末の「し」を 3 つの用法に分類した。そして、前項で、文末の「し」を「前言の説明をするという語義を持ち、モーダルな意味として、聞き手との間に意識の共有化への期待を表明をする。」と規定した。この 3 つの用法のうち、若い世代を中心に最近使用されるようになった、新しい「し」の用法は、③の「意識の共有化への期待 B」である。この「し」は、従来の「し」からは逸脱した「し」の使用であると考えられてきた。しかし、上のように、文末の「し」を規定すれば、③の「意識の共有化への期待 B」の「し」が、従来の「し」の用法と同じ枠組みの下の規定で説明が可能になる。つまり、話し手の中には、聞き手との意識の共有化という期待値があり、話し手の期待する事柄と、聞き手との見解が一致する場合が、従来の「し」の用法であり、両者の間にズレがある場合が、若い世代を中心に最近使用されるようになった、新しい「し」の用法である[5]。

[5] 井島（1999：109）は、接続助詞を期待対比構造で説明している。「所謂順接確定表現は、現実が期待に一致したことを表しているのに対して、所謂逆接

七、文末の「し」の３つの用法の使用頻度

文末の「し」の３つの用法の使用頻度を集計した。「し」の分類をするときに、次の方法をとった。まず、聞き手との共有意識への期待を確認する手段として、「ほら」「急に注意を促すときの語。（下線部引用者）（『広辞林』2003：1823）」と、共起できるか調べ、共起できる場合は、「意識の共有化への期待 A」として分類した。話し手が聞き手に理解してもらいたいという気持ちがある発話では、聞き手に注意を促す「ほら」と共起できると考えたからである。また、聞き手に同意する表現「そうですよね」「そうだね」などに続けて、支持する理由を説明する発話に使用される「し」は、「ほら」とは共起しない場合でも、聞き手との共有意識への期待があると判断し、「意識の共有化への期待 A」として分類した。また、独り言または独り言的に使用される「し」の発話は、「ほら」または、例（27）のように「まあ、いいか」に続けて使用できる場合は、話し手が自身を聞き手とみなして、確認が行われている例と考え、「意識の共有化への期待 A」として分類した。（31）は、はじめから「ほら」が、（33）は、「そうですよね」が付加されている例であり、（32）（34）（35）は、a.に元の発話を、b.にそれぞれの語を付加した発話を記す。

（31）（泣いていた直輝を心配して合宿先に駆けつけた莉子）
うん。ほっとけなかった、だけだから。ほら、あたし友達だし、ファンだし。（ブザー）

（32）（入院中の娘マリアと同じ病気の友達が亡くなって）
和子：今日、病院、行ってくるわね。
健吾：えっ？ パートは？
和子：休み、取ったから。
健吾：そう。
和子：a.友達のこと、相当ショック受けてると思うし。（流

確定表現は、現実が期待に一致しなかったことを表している」と述べている。井島（1999：109）の説明は「し」の意味を考える上でも、示唆に富むものであると考えられる。本稿では、「し」を説明するのに、話し手と聞き手の間での期待値の一致、不一致を考えている。

れ星）

b.ほら、友達のこと、相当ショック受けてると思うし。

（33）仁美：結婚は？

大澤：今のところは。

仁美：私も。こういう不規則な仕事をしてると、友達持つのも恋人持つのも大変よね。

大澤：そうですよね。予定も立てられないし。（BOSS）

次に、「でも」または「っていうか」[6]を「し」を含む発話の前に、付加できる場合は、直前の発話や出来事を否定するものであり、「意識の共有化への期待 B」として分類した。

（34）和子：ねえ？ 帰ったら、何、食べたい？

マリア：えっとね。カボチャの煮物が食べたい。

和子：梨沙さんの得意料理。

マリア：えっ？ そうなの？

健吾：母さんには、負けるけどね。

梨沙：a.本気出したら、負けねえし。（流れ星）

b.でも、本気出したら、負けねえし。

（35）（バスケットボールの試合の最中に、莉子は、直輝にげきを飛ばす。）

莉子：さっきは、怒鳴ってごめんなさい。でも、私、嘘は言ってないから。

直輝：何で途中で帰ったんだよ。

莉子：いや、周りの目が…辛くって。

直輝：a.俺の方が辛かったし。

b.っていうか、俺の方が辛かったし。（ブザー）

そして、これら２つの用法に分類できないものは、聞き手との共有意識が配慮されていないか、そして、累加、理由、説明を表現す

---

6 沖（2006：206）は、「ていうか」を使用すれば、相手の意見を A として取り込みながら、自分自身の言いたいこと B を述べ、C を主張することができる」（下線部引用者）と述べ、次の例を挙げている。
i）A 嫌いっていうか、B 苦手 C だったんだよ。

るかどうかチェックしながら、「累加、理由、説明」として分類した。結果を図 3 に示す。なお、データのパーセンテージは小数点以下第 2 位を四捨五入したため、合計が 100%にならないことがある。

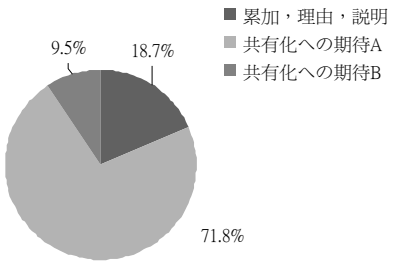


図 3　文末の「し」の用法

「話し手が聞き手との間に、同じ意識を共有できるという期待を表現する」「意識の共有化への期待 A」が最も多く、173 例（71.8%）だった。この用法が文末の「し」の中心的な用法と考えられる。次に多いのは、「累加、理由、説明」であり、45 例（18.7%）だった。そして、文末「し」の新しい用法である、「意識の共有化への期待 B」は、23 例（9.5%）で、約 1 割を占めた。それぞれのドラマ毎のデータ件数を図 4 に示す。

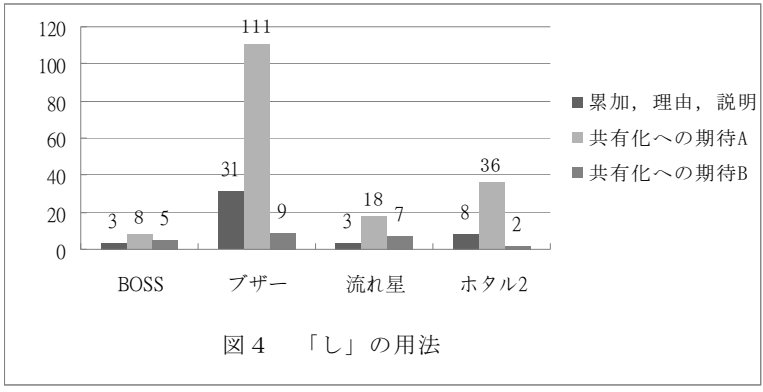


図 4　「し」の用法

「意識の共有化への期待 A」が最も多いのは、「ブザー」で、111 例だった。そして、「ホタル 2」の 36 例、流れ星 18 例と続く。「意識の共有化への期待 B」が最も多いのは、「ブザー」で、次に「流れ星」が続く。

次に、話し手と聞き手との関係を親しいかどうかによって、３つに分類した。相手との心理的距離が近い場合は、「親しい」に、心理的距離が遠い場合は、「親しくない」に、そして、それ以外は、「どちらでもない」に分類した。具体的には、友人、恋人、親子、チームメイト、チームの先輩と後輩、チームの選手とコーチ、会社の同僚、先輩、患者やその家族と主治医など、社会的地位に関わらず、仲が良いなど心理的距離が近い場合には、「親しい」に分類した。また、初対面の相手[7]、仲の良くない上司、恋敵、刑事と容疑者または犯人、詐欺師とカモ、妹を記事にされた男と雑誌記者などは「親しくない」に分類した。そして、例（33）のように流動的でどちらにも分類しにくいものは、「どちらでもない」に分類した。（33）は、初対面の相手であるが、相手が「こういう不規則な仕事をしてると、友達持つのも、恋人持つのも、大変よね。」と普通体で親しげに話したのに対して、「そうですよね。予定も立てられないし。」と答えているため、ここでは、心理的距離が少なくとも言語形式の上では遠くないと判断した。結果を図５に示す。

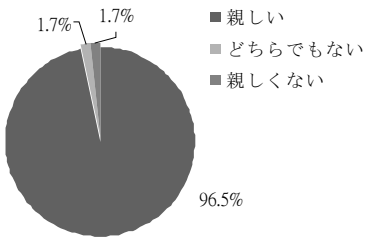


図5-1 心理的距離〈共有化への期待A〉

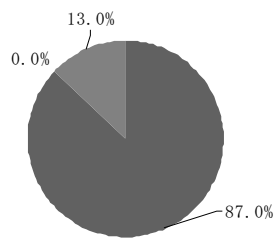


図5-2 心理的距離〈共有化への期待B〉

[7] 初対面でも、高校生など若い人達の間では、すぐ普通体で親しく会話する場合があり、このような場面で使用される「し」は心理的距離が近いと判断し、「親しい」に分類した。

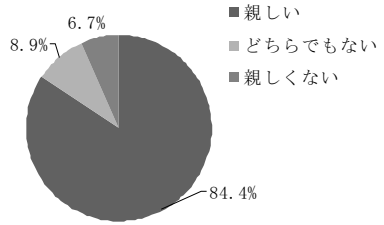


図5-3 心理的距離〈累加,理由,説明〉

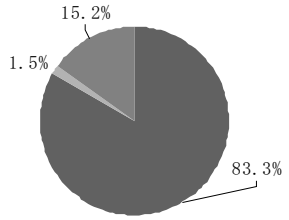


図5-4 心理的距離〈から〉

「意識の共有化への期待 A」では、話し手が「親しい」相手に「し」を使用する例は 167 例であり、96.5%を占めた。「意識の共有化への期待 B」では、「親しい」相手に「し」を使用する例は 20 例であり、87.0%だった。「累加、理由、説明」では、「親しい」相手に「し」を使用する例は 38 例であり、84.4%だった。比較のため、「から」を集計した。文末の「から」[8]744 例のうち、「親しい」相手に「から」を使用する例は 620 例であり、83.3%を占めた。「から」を基準にすると、「意識の共有化への期待 A」は、ほとんどが親しい相手に使用されること、そして、「累加、理由、説明」は「から」とほとんど同程度親しい相手に使用されていることが確認された。「意識の共有化への期待 B」は、使用数自体は多くないのであるが、「から」よりは、親しい相手に使用される割合は少し高く、親しくない相手に使用される割合は 13%と、「意識の共有化への期待 A」に比べると、親しくない相手に使用されていることがわかる。その他、文末の「し」全体では、話し手が「親しい」相手に「し」を使用する例は 225 例であり、93.4%を占め、終助詞的用法の「し」では、「親しい」相手に「し」を使用する例は 187 例であり、95.4%を占めた。

「し」の年代別データ[9]を、図 6 に示す。

8 文末の「から」のうち、範囲を表すものを除き、残り 744 例すべてを対象とした。

9 発話者の年齢は、各テレビ局のサイトを参照し、ドラマの登場人物の年齢を分類した。公式サイトに記載がないものは、ウィキペディアの記載を基に分類した。そして、どちらにも記載されていないものは、役者の実年齢を分類基準とした。

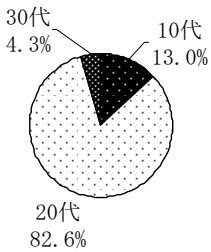


図6-1　共有化への期待B

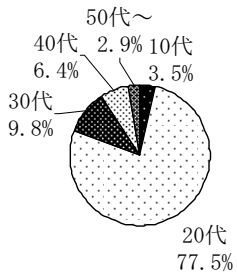


図6-2　共有化への期待A

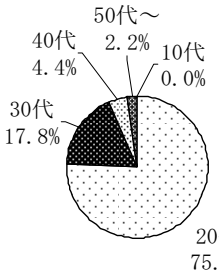


図6-3　累計，理由，説明

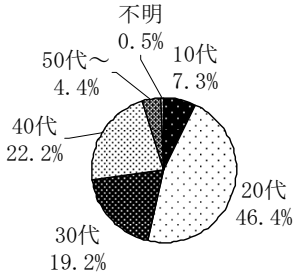


図6-4　から

「意識の共有化への期待 B」は 10 代３例、20 代 19 例、30 代 1 例であり、若い世代の 10 代、20 代が 95.6%を占め、テレビドラマでの使用頻度からも、若い世代の間でこの用法がよく使用されていることが確認された。「意識の共有化への期待 A」は、若い世代の 10 代は 6 例、20 代は 134 例と合わせて 140 例（81.0%）であり、30 代以上の大人の世代は 33 例（19.1%）であった。「累加、理由、説明」は、若い世代の 20 代は 34 例（75.6%）で、30 代以上の大人の世代は 11 例（24.4%）であった。それぞれの年代の人数が一定ではないため、比較のため、「から」を集計した。図 6-4 に示す。「から」の使用を見ると、10 代、20 代の若い世代が 53.7%で、30 代以上の大人の世代が 45.8%と、若い世代がやや多いが、ほぼ半数ずつを占めていることがわかる。ここから、「し」は若い世代でより多く使用されていると言うことができる。

八、文末の「し」の 3 つの用法の関係について

『現代用語の基礎知識』1995 年版（自由国民社）では、「とか」「みたいな」「だしぃ」などの若者が使用するあいまい表現について、「断定を避けて、相手に柔らかい感じを与えようとするもので、協調性を示す」と解説されているという[10]。これについて、佐竹（1995：59）は、これらの用法が使われる原因は、「協調性を示す」という以上に、もっと戦略的であり、「自分の意見、発言の正当性、妥当性を示すことが目的であり、その意見、発言が強すぎて聞き手に反発されることが生じないように、断定することを避けるのである」と述べて、次の例を挙げている。

（36）「その人、会ってみてどんな感じ？」「もう会いたくない、みたいな…」

（37）「今のバイト、嫌なの？」「バイト代は安いしぃ、教えるのは面倒だしぃ…」

本稿で考察した終助詞的用法の「し」でも、確かに聞き手が配慮されていた。また、これら若者用語が議論された 1995 年当時は、まだ新しい用法の「し」は使用されていないか、少なくとも現在ほど若者の間で使用されることはなかったと思われるが、これら若者用語に対する分析は、「し」の新しい用法の生じた原因を考える上でも非常に有益であると考えられる。

最後に、先行研究を踏まえ、累加、理由、説明の「し」と他の 2 つの終助詞的用法の「し」の関係について本稿での考えを述べておく。寺村（1984：72）で指摘されていたように、接続助詞「し」は、「統括命題」のメンバーを並べるとき、使われる。そして、それは「話し手と聞き手の共通の了解、ないし社会的な通念に大きくよりかかった性格のものである」と考えられる。もともと「話し手と聞き手の共通の了解」に大きく依存する「し」が、文脈により、さらに、文末に置かれることにより、モーダルな意味要素が加わり、「話し手が聞き手との間に、同じ意識を共有できるという期待を表現す

[10] 佐竹（1995：59）による。

る」終助詞的用法の「し」となったと考えられる。さらに、そこから、新しい「し」の用法が生じたと考えられる。新しい用法の「し」は、話し手の期待する事柄と、聞き手との見解の間にズレがある場合に使用されていた。聞き手の言動が話し手が期待するものとは異なり、それを修正するときに使用されるのであった。これは、直接否定すると相手の心情を悪くする恐れがある。そこで、共有意識がないという状況で敢えて「同じ意識を共有できるという期待を表現する」「し」を付加し、「本来は、聞き手と同じ意識が共有できるはずなのに」という話し手の気持ちを付け加えることによって、聞き手の意識を配慮し、なおかつ自分の主張もはっきり述べることが可能になる。新しい用法の「し」は、「し」の誤用というより、コミュニケーションの手段の１つとして、意図的に若い世代を中心に使用されているのであると考えられる。

九、おわりに

本稿では、ドラマを資料として談話の中で文末の「し」を考察し、「前言の説明をするという語義を持ち、モーダルな意味として、聞き手との間に意識の共有化への期待を表明をする」と規定した。さらに、収集したデータから、文末の「し」を次の３つの用法に分類した。①累加、理由、説明。②意識の共有化への期待 A（話し手と聞き手が同じ意識を持つ、または、持てると考えられる場合)。③意識の共有化への期待 B（話し手と聞き手が違う意識を持つと考えられる場合)。話し手の中には、意識の共有化という期待値があり、話し手の期待する事柄と聞き手との見解が一致する場合が、従来の「し」の用法であり、両者の間にズレがある場合が、若い世代を中心に最近使用されるようになった新しい「し」の用法であると考えられる。

ドラマの資料から、文末の「し」は、若い世代でより多く使用されていることが確認された。若い世代ではより「聞き手との意識の共有化」を重視し、「し」を多く使用していると考えられる。若者が

「協調性を示す」コミュニケーションの方法を好しとすることを背景に、本稿で考察した終助詞的用法の「し」はこれからも日本語の会話の中で使用され続けていくと思われる。

謝辞

投稿の段階で、査読委員の先生方より貴重なご指摘、ご助言をいただいた。深く感謝申し上げる。また、執筆者の力不足から、それらのご指摘を十分に活かせなかった部分もあり、あわせてお詫び申し上げる。今後の課題とさせていただきたい。

なお、本研究は、2010 年度行政院国家科学委員会の研究費補助金による専題研究（NSC 99-2410-H-432-004-）の成果の一部である。

参考文献

井島正博（1999）「助詞から探る日本文法(4)接続助詞あるいは期待対比構造」『言語』28-4、大修館書店、pp. 108-113

沖裕子（2006）『日本語談話論』和泉書院

国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞－用法と実例－』秀英出版

佐竹秀雄（1995）「若者ことばとレトリック」『日本語学』14-12、明治書院、pp. 53-60

白川博之（2008）「「言いさし文」の談話機能」串田秀也・定延利之・伝康晴編『シリーズ文と発話 第 2 巻 「単位」としての文と発話』ひつじ書房

高橋太郎（1993）「省略によってできた述語形式」『日本語学』12-9、明治書院、pp. 18-26

寺村秀夫（1984）「並列的接続とその影の統括命題－モ、シ、シカモの場合－」『日本語学』3-8、明治書院、pp. 67-74

泉子・K・メイナード（2001）「日本語文法と感情の接点－テレビドラマに会話分析を応用して－」『日本語文法』1-1、くろしお出版、pp.90-110